

1) 女川に元気を送る会 その1

私は女川で生まれ、育った。平成は穏やかな女川湾、稜線が街を抱くように優しい姿を見せていた黒森山、少し生臭い風の臭い、大声で話す人たちの声、それらに囲まれて私は育った。学校を卒業し女川を出て久しいが、「おながわ」という言葉を聞くと、つい耳をそばだてる自分を感じる。

また母が石巻鑄銭場の出身だったこともあり、子供の頃から石巻でもよく遊んだ。駅裏の用水路で従兄弟とザリガニを取ったことも良く記憶している。なんと駅裏のほとんどはまだ田んぼだったのだ。高校が石巻高校だったこともあり、青春の思い出はほとんどが女川と石巻である。

東日本大震災は東京で経験した。約20分も揺れが続いたろうか、院長が会議で不在だったため私が危機管理委員会を招集し対策本部を結成、幸い患者に怪我は無く、ほっとしてテレビにスイッチを入れた時飛び込んできた画面は、巨大な津波が荒浜を襲っているニュースだった。

女川に関しては壊滅的被害と報じられるのみで詳細が分からずやきもきした。3日後の朝日新聞の夕刊に鷲神地区の写真が大きく載り、壊滅的被害の実態が明らかになった。

友人、知人の安否を思うと居ても立ってもいられなかった。ちょっとしたことですぐ涙が出るようになった。被災地の物心共に受けた被害に比べることは出来ないが、私の、そして在京の女川出身者の心も大きく傷ついていたのである。

どう支援するのか、暗中模索の作業が始まった。伝手をたどり、いろいろな方と連絡を取り合い、震災後1週間の女川に行ってきたNさんを招き、3月26日女川を元気にする会準備会が開催された。女川の情報が欲しい、出来れば直接女川の支援がしたい、そういう人たちが集まったのである。

2) 女川に元気を送る会 その2

歯を食いしばって頑張っている被災地の人達に頑張れなんて言えない、せめて元気を送りたい、と考えて私達の会は始まった。会社のネットワークで集めたWさんの分も併せて約1200万円の義捐金を町に届けることが出来た。集め始めて3ヶ月のスピードだった。

嬉しかったのは震災翌年の秋、これまでの支援に感謝したいと日比谷公園でおながわ秋刀魚収穫祭を開催したことである。女川町観光協会、商工会等町ぐるみで行ったもので、復興の槌音が聞こえてきたばかりのこの時期に、なんとまあ剛毅なことだと感服したし、嬉しくもあった。

会は町の復興につれて女川元気会に改名した。どちらかといえば女川を訪れるたびにかえって元気をもらうことが多かったことと、「女川よ、元気かーい」と肩の力を抜いて活動しようという気持ちだったからである。

震災後時間がたつと関心は薄れてくる。町の人たちは忘れられてしまうことを恐れていた。私達も活動のマンネリ感に悩んでいた。この時期の支援はどう有るべきか、議論を重ねた中で出てきたことは、「女川を忘れない、女川の人に寄り添う」ことだった。

毎年東京圏から慰霊の旅としてツアーを開催した。慰霊の旅の都度、いろいろな女川の人達と交流した。千年の石碑建立に協力し皇后陛下御歌碑建立に関わったりもした。東京近傍に物産展があれば、行って手伝った。コバルトレーが来れば、千葉まで応援に行った。

一つ一つは小さな活動ではあるがいろんなことに会として顔を出すことによって、女川を想う私達がいるよ、という気持ちは伝えられたのではないだろうか。

私は平成27年4月「女川の人に寄り添う」活動の一環として女川地域医療センターに勤務することになった。

3) 女川町地域医療センター

女川地域医療センターは海を見下ろす小高い丘の上に立っている。以前は熊野神社が鎮座していた堀切山を切り崩して建てたものである。生家はこの山の北側にあった。工事で山家削られ、冬の日当たりが良くなった、と母が喜んでいたのである。

海拔 16m の岡に建つ地域医療センターも約 2m の津波に 1 階部分が襲われた。職員には死者は居なかったが、1 度は濁流に呑み込まれた人は少なくない。飲みながら何度かその時の恐怖の話を聞いた。明るく笑いながら語るその姿に、かえって凄味を感じたものである。幸い 2 階以上は問題なく、ずぶ濡れになって集まってきた町の人たちに、乾いた衣類と僅かながらも食料を供与できたという。そのためここでは低体温死は発生しなかった。

病院建築時もっと削る予定だったが、固い岩盤が出たので今の高さになったそうだ。もしもっと低かったらと考えるとぞっとする。

医療センターでの日々は楽しかった。懐かしい女川弁が病院中にあふれていた。医師、看護師は訪問医療に、外来に、入院診療にと献身的に走り回っていた。外来では知っている人が続々来る。病気のことはおいて、開業していた父や保護司をしていた母のことを話していく。一種の身内意識だろうと思うが、「女川の人」に診てもらおうとほっとする、のだそうだ。

巡回医療も担当させてもらった。稲井の仮設住宅だ。そこには尾浦、竹の浦、石浜などの人がまとまって入っていた。2 年前より仮設から復興住宅、または自立再建で新居に引っ越す人達が増えてきた。それにつれ表情に変化が表れた。自信と明るさが戻ってきたのである。

町長の言葉を借りれば、「当たり前前の生活が戻った。」だけなのだが、ここまで来るのに 5 年以上かかっていた。

4) 低体温症

地域医療センターでは、齋藤センター長がになっていた産業医の一部も任された。東北電力女川原子力発電所である。以前ここには鳴り砂で有名だった鳴浜があった。子供の頃 1 日に 2 往復しか無い幸喜丸を利用して 2 回ほど泳ぎに来たことがあった。広い砂浜にはウミネコしかおらず、秘境に来た思いがした。キュキュッという砂の音も独占できた。

発電所への通いは往復タクシーを使う。出入りには厳重なチェックがあり、自家用車は原則として使用できない。片道約 30 分かかるので運転手さんから色々話を聞いた。

御前浜出身の N さんから聞いた話である。

「堤防に船を見に行っていた数人は第一波の波で流された。なんとか地区の人達で助け合って裏の杉山に避難し一晩過ごした。雪が積もって寒い晩だった。たき火をして暖を取ったが、濡れた衣服を着ていた年寄りが次第に錯乱し変なことを話し始めた。静かになったと思ったら息をしていなかった。そんな人が 7 人居た。」

山での遭難と同様の現象で、典型的な低体温症である。先日震災直後溺死と診断されたなかで、低体温症で死亡された人達が相当数いるのではないかという報道があった。確かに一地区で 7 人もの低体温死がいたとすれば、全体ではかなりの数になるだろう。

地域医療センターや発電所に避難した人達は乾いた衣類が手に入り、誰も亡くなる人は居なかった。単に運が悪かった、では済まされない。低体温対策として災害用の備蓄には飲食物等に加え、乾いた衣類や貼るカイロも必要と考えられる。

もっとも単に温かくすれば良いわけでは無い。意識がなくなるなどの重症時は急に温めるとショックや凍

傷になったり、脳障害を起こすこともある。医療機関に搬送するのが一番だが、交通網が寸断される災害時にはこれが一番難しい。

5) 心の傷は今でも癒えない

健診データを元にした女川町の健康指数県内順位を見ると、糖尿病を示す「HbA1c6.5 以上」は1位、肥満を示す「BMI25 以上」は3位であった。余り名誉のことでは無い。しかも放置すると脳梗塞や腎不全になり、医療費が膨大になって町の財政を圧迫する。

そんな状況を打破するために、町では健康センターの職員をはじめ一丸となって町民の健康に取り組んでいる。微力ながら私も外来の患者さん達に、運動療法と食事療法の大切さを機会を見つけて説明してきた。

脂質異常も伴う体重過多のご婦人に、外来に来る度に体重測定し減量を働きかけたところ、ある日急に怒り始めた。「最近体重の2文字が頭から離れず、夜も眠れない。」と訴える。更に良く聞くと、「震災で娘を失った。気持ちが落ち込み、月命日になると泣いてばかりいる。震災直後は減った体重も、その後大幅に増えてしまった。」というのである。

いつも笑顔を絶やさない元気そうなお婦人の素顔が見えたときだった。その後彼女だけは受診前の体重測定を中止した。

女川元気で女川を訪れたとき、某仮設の地区長をしていたTさんに講演をお願いした。震災後地区をまとめ、同じ仮設の住民と協力しあって野菜を作り、子供達ともふれあいの機会を持つなど逞しく活動している、とテレビでも紹介されていた。お母さんと奥さんを亡くしたにもかかわらず、元気に新しい生活へ踏み出すようになった心の軌跡を話してもらおうと考えたのだ。しかし彼は震災時のことを説明している最中急にこみ上げてしまい、話が出来なくなってしまったのである。

「女川の人元気が良い、元気をもらった。」訪問者からよくそういう声を聞く。私もそう感じていた。しかし心の傷はまだ癒えてないのだとつくづく思う。生涯消えない性質のものかもしれない。

6) ホタテ養殖

昨秋女川町地域医療センター外来に血圧の薬をもらいに来た88歳の女性曰く、「先生肩や背中がいたくてたまんね。貼り薬もけらい」。なんと夜中に起きて北海道から届いたホタテの稚貝の耳付け作業（貝に穴を開ける作業）を手伝ったのだそうだ。女川では牡蠣むきや魚の加工場等で働いている60歳以上の女性は少なくない。それが女川の女性を元気にしているのかもしれない。それでも90歳に手が届くお婦人が、深夜家の家業を手伝うために体を痛めてまで頑張る、文字通り骨身を惜しまない姿に感銘を受けた。

高齢者でも働けるうちは働く、老年医学会だけでなく最近厚労省でもよく言うようになったが、生産手段を有する農業、漁業では以前からやってきたことなのだろう。

暮れにホタテの養殖をやっている男性を診た。「去年は「半成貝の斃死」のため、生産量が激減した。今度駄目だったら養殖を止めなければならない。」と暗い顔で話してくれた。ところが何と5月から始まる貝毒によるホタテの出荷停止である。解禁の見通しも立っていないらしい。また「半成貝の斃死」も起きているそうだ。

報道によると震災後斃死が増え始めたとの説があり、貝毒も関係が否定できないとのことだ。貝毒に関しては西日本でも起きており、全て津波のせいとは言えないだろうが科学的解明が大いに待たれる。もちろん行政には収入源に悩む生産者への支援もお願いしたい。

秋刀魚、鰹、イカ等の漁獲高も減少している。他国の乱獲が原因なのか、今までの乱獲のつげが回ってきたのか、黒潮の蛇行のせいなのか、これも詳細は不明である。漁業に従事する生産者人口の減少も続いている。

るそうだ。魚を食べて育ち、今も魚が食卓にのらない日がない私にとってなんとも心配なことである。

7) リスペクト

高校時代交際していた女性に相談されたことがある。周りから大学進学を勧められていた。しかし彼女は美容師学校に入りたいというのである。曰く「将来結婚して子供が出来る。男は女より早く死ぬ。夫が死んでも子供を育てられるよう、手に職を持ちたい。」女性はこんな発想をするのだ、と驚いたと共に強く感動した。

私の医師研修は東京都養育院附属病院(現健康長寿医療センター)で行われた。約45年前のことである。そこは老人ホームと特養が併設されていた。貧困老人の救恤のため作られた施設である。一人の老人ホーム利用女性に入所する動機を聞いた。「息子が政治活動をして忙しいが、親子二人の生活である。弱ってきた母のことが心配で活動に身が入らないといけない。息子の反対押し切ってここに入った。」とのことだった。我が身を犠牲にして次世代のために道を譲ることは、そう簡単に出来ることではない。

私は白血病などの血液悪性腫瘍を専門としていた。病気の告知で一度落ち込んでも、病と闘う決心をすると、患者さんは強い。強力な抗がん剤を使うが多かったため、吐き気、下痢、発熱、脱毛等の症状が出た。時には不幸にして亡くなった。しかし病気や副作用と戦う姿には頭が下がった。

女性を、高齢者を、患者をリスペクト出来たことは、私の財産になっている。

アメリカンフットボールの選手が怪我をさせた事件は大きな反響を呼んだ。監督、コーチが追放された。教師が生徒を、部長・監督が部員を、上役が部下を、親が子供をリスペクトすることが大事なのだというコラムを読んだことがある。

力が上の者が下の者に配慮し、尊重する、リスペクトする。それがあれば現代ももっと生活しやすい時代になる気がするのだが……。

8) 父の思い出

私の父は戦前女川で内科小児科を標榜して開業した。医院は居宅併設型で、診察室の突き当たりが茶の間だったこともあり、私は子供の泣き声を聞いて育った。

父は平成5年死亡する直前まで仕事をしていた。60年以上も地域医療に携わっていたことになる。以前は診療時間などあっても無いに等しく、時間外でもよく患者が来た。遠い島から船で来たと言われると断れず、ぶつぶつ言いながら診療していた。

ある日父が風邪を引き、休診にしていたことがある。やはり急患が来てどうしても見て欲しいと医院の玄関で粘っていたところ、寝室の2階から寝間着姿でどたどたと起きてきた父は、「医者だって人間だ！病気の時ぐらい休ませろ。」と怒鳴った。かわいそうな患者は引き帰えらざるを得なかった。父も後味が悪かったに違いない。休日当番制や時間外急患外来制度がなかった頃の話である。

父は明治生まれでもあり、幼い子供達にとって怖い存在だった。同居していた年の離れた叔父も父が怖かったらしい。石高在学時喧嘩して帰って来たことがあった。ぼろぼろの服のまま父の前に正座させられて、「身体髪膚これ父母に受く。下らんことで怪我などするな。」と一喝されたという。

女川地域医療センターに勤務してから良く父の思い出、評価を聞いた。押し並べて「優しい先生だった。」というのだ。そういえば機嫌のいいときは軍歌「天に代わりて不義を打つ……」の鼻歌等歌っていたし、酒も飲めないのに正月など晴れやかなときは、大黒米を踊っていた。家族思いでもあり、初孫が生まれてからは、子供の急患には愛想よく診てやったりしていた。

人生の節目節目に、父だったらどうしたかを考えることがある。私も子供達にとってそういう存在になっ

ているだろうか。

8) 父の思い出-2

私の父は戦前女川で内科小児科を標榜して開業した。医院は居宅併設型で、診察室の突き当たりが茶の間だったこともあり、私は子供の泣き声を聞いて育った。

父は平成5年死亡する直前まで仕事をしていた。60年以上も地域医療に携わっていたことになる。以前は診療時間などあっても無いに等しく、時間外でもよく患者が来た。遠い島から船で来たと言われると断れず、ぶつぶつ言いながら診療していた。

ある日父が風邪を引き、休診にしていたことがある。やはり急患が来てどうしても見て欲しいと医院の玄関で粘っていたところ、寝室の2階から寝間着姿でどたどたと起きてきた父は、「医者だって人間だ！病気の時ぐらい休ませろ。」と怒鳴った。かわいそうな患者は引き帰えらざるを得なかった。休日当番制や時間外急患外来制度がなかった頃の話である。

父は特発性間質性肺炎に罹患し大学病院に入院したが2週間で旅立った。仙台から霊柩車に乗せ女川に着いたのは夜の9時を過ぎていた。家に入る最後の通りに入るとほとんどの家々の明かり、門灯が灯され、門口に人々が立って迎えてくれた。父と地域の方々との固い結びつきを改めて知らされた光景だった。

女川町地域医療センターに勤務してから良く父の思い出、評価を聞いた。押し並べて「優しい先生だった。」というのだ。そういえば機嫌のいいときは決まって「軍歌「天に代わりて不義を打つ……」を歌っていたし、酒も飲めないのに正月など晴れやかなときは、大黒米を踊るなど剽軽なところもあった。家族思いでもあり、初孫が生まれてからは、子供の急患には時間外でも愛想よく診てやったりしていた。

人生の節目節目に父だったらどうしたかを考えることがある。私も子供達にとってそういう存在になっているだろうか。

9) 医者の不養生

私は40代から髪が細くなり始め、うっとうしいためスキンヘッドにした。ユールプリンナーにあこがれたのだが、残念ながら遠く及ばなかった。蔑視と同情の視線には早くから慣れたが、頭を触りたがる好奇心の強い幼児には閉口した。夏は頭から紫外線に焼けるし、蚊にも刺されやすい。冬は寒いので年中帽子が離せない。

色々ある脱毛症のうち最も多いのは男性型脱毛症である。年齢と共に進行し日本の男性の3人に1人がかかると言われる。正しくは「脱毛」ではなく硬毛から軟毛に変わることから生ずる。原因は毛嚢が男性ホルモンの影響を受けミニチュア化するため、遺伝的な関与も指摘されている。最近では飲み薬も開発されている。ただし基本的には病気ではなく自然現象らしい。そう言われれば諦めざるを得ない。

それとは別に私もいくつかの病気を持っている。現在の問題は突然来る激しい上腹痛、嘔吐、背部痛である。最初は60歳頃発症、何が何だか分からず救急車を呼んだ。次第に腹痛は下腹部に移り、陰部に放散するようになってきたため、さすがに自分でも診断できた。尿管結石である。病院でCTを取ったら石が通過した尿管の一部が軽度拡張していた。その後も忘れた頃に発作が出る。今年の5月から6月には頻数回発生した。

尿管結石はメタボの人に起きやすい。男性に多く春から夏に多い。尿酸結石が原因である。尿酸はホーレンソーやバナナ、コーヒー、紅茶、緑茶、ウーロン茶等の飲料に多い。ビールの含有量も多く、皆私の好きな物である。しかしながら発作の恐怖には勝てず、ビールを焼酎に代え、お茶類は水か焙じ茶に代えた。おかげで最近発作は小康状態である。またビールを飲みたくなる。一度は減った体重もまた増加傾向にある。

医者の不養生の話である。

10) ピンピンコロリ

普段は元気でピンピンしてあるときコロリと死ぬ。いわゆる「ピンピンコロリ」は理想だと多くの高齢者は言う。70歳代と80歳代に寝たきりになった後死亡するまでの期間を比較した論文があるが、それによれば80歳代の患者は遙かに短いそうである。若く体力があるときに寝たきりになると、不便な生活に長期間耐えなければならず、家族にも多大な迷惑を掛ける。従って私は患者には「ピンピンコロリ」理想を達成するため、日頃元気であるように食事、運動など生活療法に努力するよう強く勧めている。

私の次兄は2年前の8月オリンピックのテレビを観戦中意識がなくなり急逝した。脳出血だった。慢性腎不全で透析はしていたものの、小旅行をしたり一緒に酒を飲んだりするなど元気だった。亡くなった日にはお盆恒例の兄弟会も予定されていた。いくら「ピンピンコロリ」が理想とは言え、80歳前の早すぎる死は弟として恨めしく且つとても悲しかった。

我が家の菩提寺は石巻門脇地区にある称法寺である。去る7月震災後やっと修復が済んだ本堂で次兄の3回忌の法要が営まれた。法具が新しくなったのに比較し、柱は黒くくすんでおり無数の傷があるものもあった。津波に洗われて出来た傷なのだろうか。柱や土台がしっかりしていたから修復の期間が短くて済んだとの寺側の説明だった。本堂を出ると津波で傾いたまま青々とした葉を付けている銀杏の大木が印象的だった。

称法寺のすぐ脇で防潮堤を兼ねた新道路の建設が進んでおり、墓地も僅かだが削られたという。檀家の減少は著しいらしいこともあって新しいお墓を作る人もまだ少ないとのことであった。女川町にある照源寺の檀家の減少も止まらなると聞く。街だけでなく人々を支える部分の復興もまだ途中のようである。

11) 何気ない一言

母の血液型はB型である。保護司を長年やっていたぐらいだから面倒見が良かった。しかしここで触れたいのは血液型と性格の話では無い。

小六か中一の頃だったろうか。理科の授業で血液型の勉強をした。私はO型だった。家に帰って母と父の血液型を聞いた。父はAB型という。えっ……?! AB型とB型の両親からはO型の子供は生まれない。ひょっとしてもらいっ子なの? 本当の親は誰なの?

その頃には身長は165cmを超えていたから小さな胸とは言えないが大いに悩んだものだ。両親とも私を実子のように(実際実子だったのだが)可愛がってくれていることは理解できる年齢には達していた。だから非行に走ることは無かったものの、孤独に苛まれた時期だった。

半年ぐらいたった後勇気を出して再度母に父の血液型を聞いてみた。「AB型なんていった? 父さんはA型よ。」何のことは無い、私がO型でも不思議は無い訳である。悩んだり苦しんだりしただけ損をしたと言うことになる。

言葉には魔力があると言う。何気ない一言が人を励ましたり、立ち直らせることがある一方、不用意な一言で逆に友人、恋人同士の間人間関係が壊れることもある。内心劣等感を持っていたり気にしたりしているところを何気なく突いてしまうということであろう。以前紹介した過体重の婦人がノイローゼになった件も、私の言い方に不適切な言い回しがあったに違いない。

言葉を発する際、一番大切なことは「相手への思いやり」だという仏教の教えがあるそうだ。自分の血液型騒動を思い出すときつくづく思う。子供だけでなく話しかけて来た人を正面から受け止め真剣に対応する、慣性に流されず真摯に対応することが大事なんだと。

1 2) 子供集団といじめ

私が子供の頃はどの家も大家族だった。子供は4人以上いる家は少なくなかったし、三代が同居している家も多かった。住宅は手狭で子供達は冬でも外で遊べと追い出されたものだ。

かくれんぼ、助け鬼、戦艦ごっこ（魚雷と戦艦と飛行機がチームを作り相手と対戦）、肉弾、徒競走等々ガキ大将や上級生が指揮を執り、未就学児も混じって遊んでいた。道路はまだ人間のもので、時折馬車や魚を満載した三輪車を通るだけだった。勿論道路は舗装されていない。でこぼこ道で揺れた拍子に落ちた魚を拾って、ご飯のおかずにしていた家もあったぐらいである。

私は単に昔を懐かしむつもりは無い。私のもっと前の世代は戦争の時代で大変だったろうし、後輩の世代にも私達とは異なる遊びの風景があるのだろう。ただガキ大将を頂点にした子供集団は、子供達に社会性の初歩を学ばせてくれたのだと思う。集団で遊ぶことによりどの子も能力に応じて役割が与えられ、小さな子は規律を守ること、大きな子はリーダーシップの取り方と責任の取り方を知らず知らず習得していく。これらは決して親との関係からは学べない性質のものだ。

ミッチーブームを契機に各家庭にテレビが出回った昭和32年頃から徐々に遊び方が変化した。子供達はテレビに夢中になり余り外へ出なくなった。子供の大集団が無くなったのもその頃からでは無いだろうか。

次第に道路は車のものに成り下り、子供の遊び場は学校や公園に限定され、遊びは同級生同士で行われるだけになった。そして校内暴力が問題になったのもこの頃である。

いつの時代にもいじめはある。ただいじめる側にもいじめられる側にももっと余裕があった。人的関係に抵抗力があった。

いじめで自殺した女の子の報道に接し感じたことである。

1 3) 記憶と未来

昭和35年チリ地震津波が東北をはじめとして太平洋沿岸を襲った。私が中学校2年の時だった。約4メートルの大津波である。宮城県でも50人を超える死者行方不明者が出たが、女川町は発見が早く死者は0だった。しかし埋め立てて市街地を造ってきたため町の海岸地帯はほとんど海拔0メートルだったため甚大な被害を被ったのである。

その時の町民の記憶が仇になったとしか言えないことが今回の大震災で起きた。チリ地震のとき被害が全くなかった地域（海拔4-8メートル）で死者が多く出たのである。ここまでは来ないだろうと過去の記憶に従ったための悲劇だった。

アメフラシ（海に棲む軟体生物）のエラを指で刺激した後、再び指を近づけると、最初よりも早くエラを引っ込めるようになるそうだ。指を脅威として記憶したのだ。アメフラシの反応のような原始的な記憶であっても、進化的観点からは有利になる。生物は過去の一部を未来と統合し、新たな課題に挑戦できるようになるのだという。

アメフラシでも記憶して未来に備えるというのになぜ人間に出来なかったか。津波の高さが違う、地球の裏側からきた津波と日本近海で発生した津波では遡上率が異なる等々、いろいろな要素が複雑に関与したことは理解できる。「過去の一部（記憶）を未来と統合し、新たな課題に挑戦」するためには豊かな創造力と実行力が必要なのだろう。

女川中学校の生徒達が創った「女川のいのちの石碑—千年後の命を守るために」運動はその良い例だ。肉親を亡くした生徒達が先頭に立ち、教師や親を巻き込み、地域を巻き込み、何十基もの石碑を建てたのだ。それだけではなく、津波の教科書を創り普及する運動を高校卒業後の今も続けている。

なんとも頼もしいことである。

1 4) 孤独死

孤独死が時々報道で特集される。身寄りがない高齢者が殆どだ。大抵が貧困層に属する。広がる格差の一環として取り上げられたりもする。

死因不明の急性死や事故で亡くなった人の検案、解剖を行っている東京都監察医務院が公表しているデータによると、東京 23 区内における一人暮らしで 65 歳以上の人の自宅での死亡者数は、平成 27 年に 3,127 人となっている（厚労省平成 29 年版高齢社会白書）。10 年前 1860 人だったから約 70%増加しており、都会では孤独死はそう珍しくなくなっている。

先日友人 S さんから知らせがあった。復興住宅の一室で、中学の同級生が亡くなったというのである。死亡してから一週間は経過していたそうだ。彼は集団就職で上京し、結婚し、離婚した。60 歳を過ぎて交通事故にあり杖がないと歩けなくなった。そのため帰郷したが今度は大震災に遭いすべてを失った。絶望し酒浸りになった。足が悪いのに飲み過ぎるためしょっちゅう転倒しては救急隊の世話になる。女川町地域医療センターでは要注意人物になっていた。

震災後生活が荒んだ人は少なくないと聞く。パチンコに走りなげなしの財産を失う人もいたらしい。彼の場合はアルコールだったわけだ。そんな友人の孤独死は私にとってショックだった。

彼は寂しくなると時々親戚でもあり、同級生でもある東京の友人（女性）に電話して、生活の苦しさとか心の内を話していたそうだ。彼女から聞いた話では私が春に女川を離れてしまってさみしくなった、とつぶやいていたとか。

私はアル中の人の所に酒を持って遊びに行くのも気が引けるし、とはいってもお菓子や果物を喜ぶ男でもない。そんな理由をつけて女川に 3 年間も居たにもかかわらず一度も彼の所を訪れなかった。

それが悔やまれてならない。

1 5) 人口減少と少子化

日本の人口減少が言われて久しい。少子化が原因である。結婚率が減少し、独身男女が増えてきたとか子供を産む環境に無いとか、教育に金がかかるため 2 人以上子供は欲しくない夫婦が増加した等いろいろな原因が取りざたされている。

私の家族を例にとると 4 人兄弟が結婚し 9 人の子供を産んだ。その子達が産んだ孫は 5 人である。9 人中 5 人が未婚やら離婚やらで子供がいないのだ。妻の方も似たようなものである。3 人兄妹から 6 人の子供が出来たが孫世代はまだ 3 人だけである。人口が減るわけである。

10 年以上前、友人の山梨医大婦人科教授の講演を聴いたことがある。主たる内容は人工受精の話だったが、運動部の学生の精子を測定したら約半数に数の減少を認めた話には驚いた。

先日の某新聞にも「不妊男性 8 割、精子に問題」の記事が載っていた。不妊の原因の約半数が男性に問題があることが知られている。その 8 割に精子をつくる機能に問題があるという。昨年欧米の男性の精子の数がこの 40 年で半減したという調査結果も発表されている。中国でも日本でもその傾向は変わらない。数（濃さ）だけでなく、見た目は元気でも中身が老化した精子が増加しているという。

気になるのは原因と対策だがまだ分かっていない。加齢が関係していることは間違いない。喫煙、メタボ、サウナ、禁欲なども関係しているそうだ。減量したり、ある種のビタミンを取ることによって精子の改善が認められることもあるという。

少子化だけが原因ではないが、町から子供達の声が聞こえないのは悲しいものである。飛び込んだ野球のボールで窓ガラスを壊されたり、大事な花を折られたり、塀に落書きをされたり、悪戯された大人が子供を怒鳴り追いかけて回す、そんなのどかな時代がまた見たいものである。

16) 青春

気がつくとも9月になっている。今年も2/3が過ぎたことになる。戌年生まれの私にとって6回目の年男だったがあつという間に終わろうとしている。時間がたつのが速すぎてなんとなく焦りに似た感じを抱かざるを得ない。

余生という言葉がある。サラリーマンであれば定年後、自営業であれば跡継ぎに引き渡した後の時代を言うようである。忙しく送ってきたそれまでの生活に区切りをつけた、余裕ある生活という意味なのだろう。でも人生の主たる部分は終了し、その後の余った時間というニュアンスもありそうだ。

私は余生という言葉が好きではない。生活臭のない趣味的な言い方のような気がするのだ。物の生産に携わる農業、漁業等の人達や役者等の芸術家、政治家には無縁な言葉だ。彼らは働くことに誇りを持っているからだろうか。

私ももっとバタバタ足掻きたい。坂本龍馬ではないが、どぶの中でもいいから前のめりに死にたい。北海道に住み自然を相手に暮らし、最後はアフリカで旅立った高校の友人を見習いたい。

その為には何が必要か。

「若者よ」の歌ではないが、志を支えるのは健康な体だろうと思う。医者の話は必ずそこに行くから嫌だと言われるかもしれない。でも最低限の健康がなければ未来は来ない。しんどいけれど未来のためには今を必死に精進するしかないのだと思う。

最後に大好きな詩、サミュエル・ウルマンの「青春」（作山宗久訳）を紹介しよう。特に勇気をもらうのが次の一節だ。

（前略）

青春とは臆病さを退ける勇氣

やすきにつく気持ちを振り捨てる冒険心を意味する。

ときには、20歳の青年よりも60歳の人に青春がある。

年を重ねただけで人は老いない。

理想を失うときはじめて老いる。

歳月は皮膚にしわを増すが、熱情を失えば心はしぼむ。

（後略）

17) おながわ会

震災後直後知人の故郷橋浦地区に行ったことがある。北上川河口近くでただでさえ広々としている地形だったが、家々が流されてしまっても何も無い風景は茫漠としたものだった。橋浦地区の鎮守様に登ってみた。眺望は良いとは言えなかったが樹間から一部流された新北上大橋が望見された。親友のS君が通った大川小学校は川の向こうだった。

大震災を機に女川を支援するための会を立ち上げた経過は前に触れた。活動する中で「支援」は女川だけに留まっていたには限界があることを感じた。女川町自体が石巻圏の一員であり、経済的にも社会的にも密接に関連している。支援活動も石巻圏の中でもっと有機的な関係を構築していった方がいいのではないか、最近そう考えるようになってきている。

東京みやぎ石巻圏人会という組織がある。故郷を石巻圏にもつ関東在住の人たちと地元との交流組織である。肩を張らず活動を続け今年 30 周年を迎えた。ふるさとと「共生」する組織である。

私達も石巻圏人会と関係を持ちながら女川を応援していきたいと考えている。今年度から女川元気会から「おながわ会」に会は発展した。残念ながら会員の減少に歯止めがかからず、支援する会としては活動が難しくなったこともあるが、長期に故郷に寄り添い、応援すると共に会員の親睦も深めていく、そんな活動をしていきたい。

今年も慰霊の旅を企画した。女川だけでなく大川小、南三陸町も回る予定だ。震災の原点を確認したいと思う。また 10 月 20 日は女川町と共催で女川、石巻の歴史講演会を開催する。元石巻教育長阿部和夫氏と民間考古学者三宅宗義氏の文化講演会を開催する。特に三宅氏の講演は女川に南北朝時代御所があった可能性を考える内容らしい。事実なのか、妄想なのか、なんとも夢のある話になりそうだ。

18) 人生の最終段階

祖母は花を造るのが趣味だった。特にダリアが好きだった。私の子供の時代運搬の主役は馬車で、早朝出発時馬達は道路に落とし物を残す。よく祖母にそれを拾いに行かされた。今でいえば地域清掃なのだが、当初は結婚前の叔父が、そのうち兄が、そして遅からず私にその名誉の役がまわってきた。肥料が効いたダリアは美しかった。

芽を出し花を咲かせ実を付けそして枯れる。人間の一生も同じようなものだが、その最後の段階をどう迎えるかがなんとも難しい。急変して救急隊が呼ばれ、さあ蘇生をという段階で、急に患者は尊厳死を希望していたと家族が言い出す例が全国で約 2000 件あるという。救急隊は救命を仕事にしているのでとても困惑するそうだ。家族に話すだけでなく、一筆遺言として残しておくことが望まれる。

私が勤務している現在の病院は、ホスピス併設の療養型病院である。療養病床でも原則として看取りを原則としている。治って社会復帰出来そうな人は入院出来ない。従って人生の終着駅とも言えるが、患者はなぜか概ね穏やかな顔をしている。キリスト教系の病院のこととも関係あるのだろう。医師、看護師、介護士以外にもシスター達が患者と会話をしている。重層的な関わりが死への不安を和らげているのかもしれない。

老年病を専攻して以来、私の患者は通常当私より遙かに高齢だった。そのせいか死に瀕する患者でも淡々と患者さんに向き合うことが可能だった。でも数年前私は古希を迎えた。病院では私と同年配、または遙かに若い方が患者さんとして入院するようになった。そして彼らは治る可能性のない重い病気に侵されている。

健康な私と重病の彼らを隔てたものは何だったのか、考え込むことがある。その答えは出ていない。